

カバラ数秘術

JJ1SXA/池

「当たるも八卦当たらぬも八卦」の意味は、占いは、当たることもあるし、外れることもあるものなのだから、占いの吉凶は気にするなということ、悪い結果が出たときに使われることが多いようだ。

易経で、算木と呼ばれる筮竹を使って現れる、陰と陽を示す算木の組み合わせで得られる八種の形から諸々を占うのが八卦、何やら、じゃらじゃらと筮竹を回す姿は、これぞ易者かとも思うが、うさん臭さも感じる、これでは救われないなと自覚があるhi

易者の動作は、最初に五十本の筮竹の中から一本を抜き取り、残り四十九本の筮竹を両手で二分し、右手に取った筮竹から一本抜き取り、次に左手につかんだ筮竹を、八払いしていく（二本ずつ四度取り出しても良いし、一本二本三本と数えながら八本取り出しても良いようだ）、最後に八で割り切れない数に残り、それと右手から抜き取った一本を加えたものが、得られた卦の象数だとか、まあ、最初からあまり信じていないから、うさん臭さを感じるのだろう。

占いには、「タロット占い」、「姓名判断」、「四柱推命」、「手相」、「風水」、「占星術」、「数秘術」等々、数多く種類がある、この中で、ピタゴラスがその起源とも言われる「数秘術」を取り上げて見る。

「数秘術」の中でも、「カバラ数秘術」のことを一寸調べたが、その発祥は古代ユダヤであると言われていて、もともと、「数」という概念に神秘を見出して、その神秘を解析しようとして始まったのが「数秘術」と呼ばれるものだ。

数秘術の生みの親は「ピタゴラスの定理」を作ったピタゴラスであると言われており、彼は「数秘術の父」と呼ばれていた、その後、ピタゴラスの思想は哲学者プラトンに引き継がれ、成熟し、今の数秘術により近づいたのだとされています。

そしてその「数秘術」に、ユダヤ教から生まれた神秘主義(カバラ)が結びついて「カバラ数秘術」という存在が生まれたようです。

占術の方法は、一般的に、生年月日や姓名を数字に置き換えて、一桁（11、22等は例外の場合有り）になるまで全ての数字を足し、最後に出た数字（数字根）の持つ意味から占う。

誕生日からは誕生数が、姓名からは姓名数が導き出される、また、誕生日や姓名の一部だけ計算したり、誕生日と姓名の数を組み合わせたりする事もある（誕生数・姓名数は、違う用語が使用される事もある）、日本人の場合、姓名をローマ字（ヘボン式）で表記し、そのアルファベットをさらに数字に置き換える事が多いようだ。

例：1987年6月5日生まれなら、 $1+9+8+7+6+5=36$ 、 $3+6=9$ でカバラ数は9となる。

運命数「9」の性格は「ロマンティスト」、理想を追い求めるロマンティストで、感受性が豊かでとても傷つきやすい、複雑で繊細な性格をしている、弱点は「感受性が強い」、気分屋で少々精神的にムラがあることが難点、感情の起伏が激しいので、周囲からは扱いにくい人と思われるかも。…こんな結果が出されている。

ちなみに、私の「運命数」を計算したら、「9」となった、何だ何だ、でも、半分以上は合っているかもと思う。

以下は、運命数の特徴で、性格と弱点を記しています、(1)「リーダー気質」・「過信」、(2)「穏やか」・「意志が弱い」、(3)「自由人」・「飽きっぽい」、(4)「努力家」・「柔軟性がない」(5)「器用な人気者」。「ドライな考え」、(6)「繊細」・「お節介」、(7)「真面目でユニーク」・「動じない」、(8)「素直」・「黒白はっきり」、(11)「繊細な完璧主義者」・「気疲れ」、(22)「カリスマ的存在」・「やりすぎ」、以上は抜粋だ。

あなたの運命数は？「当たるも八卦当たらぬも八卦」だ、信じる信じないは、あなた次第hi

カバラ数の数学的考察。

カバラ数は、生年月日を6～8桁の自然数とみなし、それを9で割った余りと同じで、違いは9で割り切れる場合の「余り0」を9と読み替えていることだけである。

10進法で表された自然数の各桁の合計が9で割った余り（+9の倍数）に一致することは、「九去法」と呼ばれる定理に関連している。

*九去法の定理 = 任意の自然数の各桁の合計が9の倍数なら、その数は9で割り切れる。

この証明は、

任意の自然数を $N = x_1 + 10 x_2 + 100 x_3 + 1000 x_4 + \dots$ で表す。

この時

$N = x_1 + (9+1) x_2 + (99+1) x_3 + (999+1) x_4 + \dots$

$= (x_1 + x_2 + x_3 + x_4 + \dots) + (9 x_2 + 99 x_3 + 999 x_4 + \dots)$

第2の()内は9の倍数で、9の倍数に別の9の倍数を加えた結果も9の倍数である。

従って第1の()が9の倍数なら、Nは9の倍数になる

上の第1の()内をm、第2の()内を9nと置けば $N=9n+m$ だから、mを9で割った余りがNを9で割った余りに一致する、それがカバラ数（ただし0は9と読み替える）である。

九去法のポイントは、各桁が9で割った商と余りに分解できる点で、従って順序に依存しない。

ちょっと頭が痛くなるような文章ですが、ご理解いただけましたか？クイズ代わりに、じっくり眺めてください、何処かで、な～んだとなると思います、皆さんは若い（私に比すと…）ので、関係ないでしょうが、私には、ボケ防止に役立ちます。

このように書くと、わりと簡単に理解したように思われるでしょうが、とんでも無い、相当の時間を要しました。

「直角三角形の斜辺の2乗は、直角をはさむ辺を2乗して足したものと等しい」というのが、ピタゴラスの定理といわれるもので、この定理・公式を知らない人はいないでしょうが、この名称について、「ピタゴラスの定理」＝「三平方の定理」は常識、ピタゴラスの定理が日本に伝わった時から、「ピタゴラスの定理」＝「三平方の定理」だと思っていたが、中国ではこの三平方の定理を「勾股定理（こうこていり）」、「商高定理（しょうこうていり）」等と呼び、日本の和算でも中国での名称を用いて「鉤股弦の法（こうこげんのほう）」、等と呼んでいた。

註：「勾股」とは、中国古代の数学で直角を成す長短二辺のこと、「鉤股弦」とは、和算で、直角三角形の直角を挟む短い辺（鉤）と長い辺（股）と直角に対する辺（弦）のこと。

三平方の定理という名称は、敵性語が禁じられていた第二次世界大戦中に文部省の図書監修官であった塩野直道の依頼を受けて、数学者末綱愨一が命名したものであるとのこと。

いやいや、そんなに新しいこととは、露知らずでした（私が生まれた後のこと）、だが、「敵性語」などという単語は現在では死語でしょう。

野球の用語も、言い換えさせられたが、「ストライク→よし1本」、「ストライクツー→よし2本」は分かりやすいが、「バッテリー→一対打機関」、「ホームチーム→迎戦組」、「ビジターチーム→往戦組」あたりになると、一寸分り難い、平和は大事だと思う。

本題から、あっちこっちと脱線した文章になりましたが、それもこれも、原稿用紙を埋める為です、ご愛敬でご容赦下さい。